

# 「佐賀牛」の低コスト生産プロジェクト



有限会社 中村牧場  
(なかむらぼくじょう)  
佐賀県唐津市  
設立年月日 平成 18 年 3 月  
《認定農業者》《家族経営協定締結》

## 推薦理由

(有)中村牧場は、年平均で黒毛和種肥育牛 1,416.4 頭および繁殖雌牛 51.0 頭を飼養する、県内でも大規模な肉用牛経営である。創意工夫と熱意をもって、近年の規模拡大と販売成績向上につながる取り組みを行ってきた結果、現在では、「佐賀牛」ブランドの有利販売と低コスト生産により収益性の高い肉用牛肥育経営(販売肉牛 1 頭当たり当期純所得 19 万円)を確立している。なお、本経営は家族経営協定の締結(平成 18 年 1 月)や法人化(平成 18 年 3 月)に積極的に取り組み、家族経営を中心とした経営体でありながら、職場環境の向上に努めている。

以下に評価された特色ある取り組みの内容を示す。

### (1) 優れた肥育技術

肥育技術は、資質に富んだ肥育モト牛の能力を発揮させる高度なものをもっており、販売肉牛の枝肉格付等級「5 率」が 17.0%、佐賀牛の要件である BMS 7 以上が 35.1%、「A 4 以上」が 62.0%と良好な肥育成績を収め、全国肉用牛枝肉共励会(東京都食肉卸売市場主催)で 3 年連続上位に入賞(平成 15~17 年度)する実績をもっている。

### (2) 将来を考えた経営感覚

平成 13 年 9 月、BSE の発生により牛枝肉市況が暴落し、当時、多くの肉用牛農家が回復しない子牛市況や枝肉市況に絶望していたが、中村牧場では新たに牛舎を建設し、安価になった子牛を多く導入した結果、枝肉市況が回復した後に販売することに成功してきており、優れた経営感覚を保持しているといえる。

### (3) 創意工夫による飼養管理

当経営では、牛舎建設に当たり機械化ができるよう通路、飼槽等を広く建設している。とくに中古フォークリフトを利用した移動式自動給餌機(濃厚飼料用、粗飼料用)など牛

飼養管理の効率化、合理化を推進した結果、飼料給与時間と労力を軽減し、飼養牛の観察時間を確保でき、事故予防に効果をあげている（事故率0.8%）。

#### (4) 繁殖部門の導入

肉用牛肥育経営は、牛枝肉市況と導入価格に影響されるが、高騰する導入価格を低減するため、長女を中心に繁殖部門（自家産肥育牛の生産）に取り組んでいる。繁殖部門の導入にあたっては、先進事例の調査等を通じて繁殖ノウハウを習得し、平成17年からフリーバーン牛舎による省力管理と哺乳ロボットを利用した超早期離乳技術に取り組んでいる。繁殖成績はたいへん良好で、分娩間隔が12ヵ月を下回る繁殖雌牛も多い。

#### (5) 耕種農家との連携による資源循環型畜産経営

唐津地域では、耕種農家がたい肥の利用について熱心であることから、当経営が良質たい肥の供給元として注目されている。たい肥は、当経営がJAに原料を販売し（JAのたい肥センターに搬入）JAにてたい肥化された後、耕種農家に安価で販売されている。当経営が大規模な肥育経営の飼養管理に集中できるような環境の整備をJA等関係機関のサポートにより実現されたことが、当経営の発展に重要な役割を果たしてきたといえる。

#### (6) 地産地消への取り組み

JAの協力を得て、販売した肉牛（牛肉）のうち1頭を、毎月「感謝祭」として地元Aコープにて割安で販売し、「佐賀牛」の啓発普及と消費拡大を図っている。また、学校給食でも毎月100kgほど利用されている。

#### (7) 地域社会への貢献

飼養規模の拡大とともに、牛舎内の環境美化等の業務のためにパートや地元シルバー人材センターを通じた高齢者を雇い入れており、地域に雇用の場を提供している。

また、唐津地域は本県で最大の畜産地帯であり、本人や長女が各種部会の役員を務めるなどリーダー的存在となっている。

以上のように当経営は、「佐賀牛」の低コスト生産による経営の安定化を図るとともに、地域とともに歩む経営であり、本県畜産を担うリーダー的存在であることから、ここに当経営を推薦するものとする。

（佐賀県審査委員会委員長 和田 康彦）

## 発表事例の内容

### 1 地域の概況

#### (1) 一般概況

当経営は、海(玄界灘)と山が調和し、自然豊かで農業が盛んな唐津市にある。当市は、平成17年および18年に1市6町1村(旧唐津市、浜玉町、相知町、巖木町、肥前町、鎮西町、呼子町、七山村)が合併し新たな唐津市として生まれ変わった。

また、市町村合併とあわせて、地域のJAも、平成18年4月1日に唐津市農業協同組合、松浦東部農業協同組合、佐賀松浦農業協同組合、上場農業協同組合の4JAが合併し、新たな唐津農業協同組合(以下、「JAからつ」とする)として誕生している。これにより、JAからつは本県で農産物販売高が最も大きいJAになった。

#### (2) 農業・畜産の概況

JAからつの平成17年度農畜産物の総販売額は275億32百万円で、その内訳は畜産販売額が111億41百万円(40.5%)を占めており、畜産が地域の主要な産業となっている。このうち肉牛販売額は84億25百万円(30.6%)、子牛販売額は13億10百万円(4.8%)である。

表 平成17年度農畜産物販売実績(JAからつ)

区 分	平成17年度販売実績		割合
	数 量	金 額	
畜 産		11,141,805 千円	40.5 %
うち生乳	9,352 t	756,584 千円	2.7 %
うち子牛	2,920 頭	1,310,337 千円	4.8 %
うち肉牛	10,542 頭	8,425,984 千円	30.6 %
うち子豚	1,244 頭	21,066 千円	0.1 %
うち肉豚	17,591 頭	544,895 千円	2.0 %
うち鶏卵	165 t	36,258 千円	0.1 %
うちその他	460 頭	46,681 千円	0.2 %
農 産(米など)	182,960 t	2,539,480 千円	9.2 %
野 菜	20,760 t	6,338,931 千円	23.0 %
果 樹	18,108 t	6,379,593 千円	23.2 %
特 産	6,605 t	714,442 千円	2.6 %
直 売		417,929 千円	1.5 %
合 計		27,532,180 千円	100.0 %

## 2 経営・生産活動の内容

### 1) 労働力の構成 (平成 18 年 6 月現在)

区分	続柄	年齢	農業従事日数 (日)		畜産部門 年間労働時間 (時間)	部門または 作業担当	備考
				うち畜産部門			
構成員 (家族)	本人	57	250	250	8,125	経営の総括 モト牛導入	代表取締役 (社長)
	妻	56	100	100		肥育牛管理	取締役
	長男	33	300	300		牛管理全般 (主に肥育牛)	取締役 (専務)
	長男妻	31	100	100		事務管理全般	取締役
	長女	31	300	300		牛管理全般 (繁殖牛責任者)	取締役 (技術部長)
	次男	25	300	300		牛管理全般 (主に肥育牛)	取締役
従業員	なし						
臨時雇	のべ 1,278 人日				10,220	飼槽・牛舎の 清掃等	パートおよびシル バー人材センター

畜産部門年間労働時間については、平成 17 年 1 月～12 月を参考に掲載した。

### 2) 収入等の状況 (平成 17 年 1 月～12 月)

部門	種類・品目	飼養頭数・面積	販売・出荷量	販売額・収入額	備考
畜産	肥育牛	雌肥育 1,210.9 頭 去勢肥育 205.5 頭 〔成雌牛 51.0 頭〕	雌若齢肥育 578 頭 去勢若齢肥育 185 頭	662,273 千円	
	たい肥			1,920 千円	

### 3) 土地所有と利用状況 (平成 18 年 6 月現在)

区分		実面積 (ha)		飼料生産利用のべ面積 (ha)	
			うち借地面積		うち借地面積
耕地	水田	0.33			
	転作田				
	畑	2.00			
	未利用地				
	計	2.33			
草地	個別利用地	0.54			
	共同利用地				
	計	0.54			
野草地					
山林原野		8.78			

畑については、平成 18 年 6 月に取得。今後、自給飼料生産を行う予定。

4) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績 (平成 17 年 1 月 ~ 12 月)

経営の概要	労働力員数 (畜産部門・2000時間換算)		家族	4.1 人	
			雇用	5.1 人	
	飼料生産用地のべ面積			-	a
	稲ワラ回収			-	a
	肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種		1,416.4	頭
		交雑種			頭
		乳用種			頭
年間 肥育牛 販売頭数	肉用種		763	頭	
	交雑種			頭	
	乳用種			頭	
収益性	年間総所得			144,681,813 円	
	肥育牛 1 頭当たり年間所得			102,148 円	
	所得率			21.8 %	
	肥育牛 1 頭 当たり	部門収入		468,931 円	
		うち肥育牛販売収入		467,575 円	
		売上原価		321,574 円	
		うちもと畜費		212,186 円	
		うち購入飼料費		103,111 円	
		うち労働費		9,846 円	
		うち減価償却費		11,607 円	
生産性	肉用種 (黒毛和種去勢若齢)	肥育開始時	日齢	290 日	
			体重	262 kg	
		肥育牛 1 頭当たり	出荷時月齢	939 日	
			出荷時生体重	669 kg	
		平均肥育日数			649 日
		販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体重 (DG)			0.664 kg
		対仕向事故率			0.0 %
		販売肉牛 1 頭当たり販売価格			941,252 円
		販売肉牛生体 1 kg 当たり販売価格			1,407 円
		枝肉 1 kg 当たり販売価格			2,240 円
		肉質等級 A 4 以上格付率			65.4 %
		もと牛 1 頭当たり導入価格			420,863 円
	もと牛生体 1 kg 当たり導入価格			1,604 円	
	肉用種 (黒毛和種雌若齢)	肥育開始時	日齢	304 日	
			体重	239 kg	
		肥育牛 1 頭当たり	出荷時日齢	951 日	
			出荷時生体重	598 kg	
		平均肥育日数			647 日
		販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体重 (DG)			0.556 kg
		対仕向事故率			1.9 %
		販売肉牛 1 頭当たり販売価格			844,224 円
		販売肉牛生体 1 kg 当たり販売価格			1,411 円
		枝肉 1 kg 当たり販売価格			2,230 円
		肉質等級 A 4 以上格付率			60.9 %
		もと牛 1 頭当たり導入価格			312,704 円
		もと牛生体 1 kg 当たり導入価格			1,311 円
		肉牛出荷 1 頭当たり差引生産原価			594,438 円
肥育牛 1 頭当たり投下労働時間			24.0 時間		

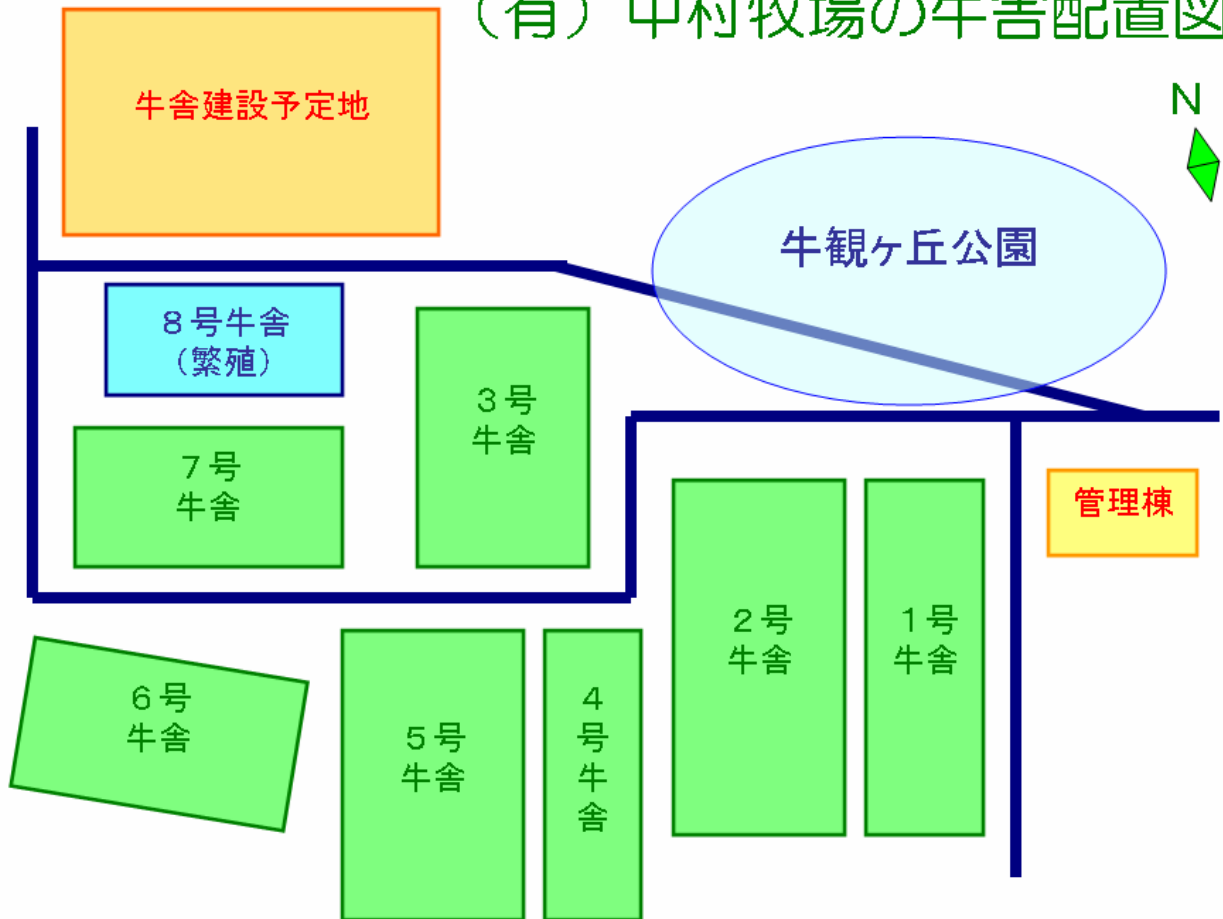
(2) 技術等の概要

経営類型	肉用牛肥育主体経営	
地帯区分	中間農業地域	
飼養品種	黒毛和種	
後継者の確保状況	既に就農している	
飼料	自家配合の実施	なし
	TMRの実施	なし
	サイレージ給与の実施	なし
	食品副産物の利用	なし
繁殖・育成	ETの活用	なし
	カーフハッチの飼養	あり
	採食を伴う放牧の実施	なし
肥育管理	除角の実施	あり
販売	加工・販売部門の有無	なし
	ブランド肉生産等	「佐賀牛」
	地産地消の取り組み	販売肉牛1頭を毎月Aコープで割安販売
その他	協業・共同作業の実施	なし
	施設・機器具等の共同利用	なし
	共同堆肥センターの利用	あり（JAのたい肥センターに販売）
	ヘルパーの活用	なし
	コントラクターの活用	なし
	公共育成牧場の利用	なし
生産部門以外の取り組み	研修生等受入	

5) 主な施設・機械の保有状況

種類	名称
畜舎・施設	牛舎7、繁殖牛舎1、たい肥舎、管理室・事務室、倉庫、ノコクズ倉庫 プレハブ従業員休憩所
機械・器具	飼料攪拌機、飼料計量機、ワラ粉碎機、デジタル牛衡機、トラック3、ショベル ローダ3、トラック、フォークリフト3、大型トラック、パワーショベルコンボ2、 トラクター、ブルドーザー、飼料分配用台車、ウォーターカップ、飼料分配用台 車7、リフト給餌器2、精液ポンベほか

## (有) 中村牧場の牛舎配置図



### 6) 家畜排せつ物の処理・利用状況

#### (1) 処理の内容

処理方式	混合処理
処理方法	搬出後、JA たい肥センターに搬入
敷料	ノコズ

#### (2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
販売	100	JA に販売 (JA のたい肥センターへ搬入)	中村牧場は、JA のたい肥センターに 600 円 / t で販売。 たい肥センターは処理後、耕種農家に 4,500 円 / t で販売。	

### 3 経営の歩み

#### 1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和 45	畜産	乳用種肥育 (去勢) 100 頭		(本人) 運送業に従事 (父) 経営主体 (家畜商) (本人) 就農
47				規模拡大のため牛舎等施設移転
53		乳用種肥育 (ヌレ子) 100 頭 (中子) 50 頭		
59		乳用種 250 頭 黒毛 (去勢) 80 頭		乳用種モト牛価格の上昇 黒毛和種 (去勢) を導入し、切り替えを図る。 (宮崎県より導入を開始) (佐賀牛のブランド化に尽力)
63		黒毛和種 423 頭		(基礎配合飼料「佐賀牛 12 号」の試験)
平成元		黒毛和種 500 頭		近代化資金で牛舎建設 (300 頭) (ビールかす発酵飼料の試験 (肥育初期))
10		黒毛和種 1,000 頭		
11				販売高 4 億円達成 近代化資金で牛舎建設 (288 頭)
12				リース牛舎建設 (240 頭、144 頭) (繁殖部門の試験を開始)
13				自己資金で牛舎建設 (288 頭)
14				
15		黒毛和種 1,500 頭		土地購入 (現在地隣接)
16				" 自己資金で牛舎建設 (288 頭)
17				繁殖牛舎建設 (フリーバーン牛舎 50 頭)
18				家族経営協定の締結 有限会社 中村牧場を設立 (3 月) 農業経営改善計画の認定 畑 2ha の購入 牛観ヶ丘公園を建設中 牛舎を建設中 (300 頭)



## 2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
畜産部門労働力(人)	8	8	8	8	8
成雌牛平均飼養頭数(頭)	-	-	-	-	51
肥育牛平均飼養頭数(頭)	1,364	1,435	1,362	1,403	1,416
肥育牛出荷頭数(頭)	697	823	800	775	763
畜産部門の総売上高(千円)	540,904	608,551	594,021	583,889	664,193
主産物の売上高(千円)	453,025	465,989	600,983	612,063	662,273

## 4 特色ある経営・生産活動の内容

### (1) 優れた肥育技術

飼養管理技術は、肥育前期において、ビールかす発酵飼料と良質乾草の給与体系、さらに清潔な飼槽および給水器により、家畜疾病がなく、長期の濃厚飼料多給に耐えうる「腹づくり」を行っている。肥育後期は、当経営で給与体系を確立した佐賀牛指定配合飼料「佐賀牛12号」を食い込ませることにより、きめ細やかで風味豊かな牛肉に仕上げることが可能となっている。販売肉牛は、「佐賀牛」ブランドとして、多くの購買者が狙っており、高値で取り引されている。

このように、資質に富んだ肥育モト牛の能力を発揮させる高度なものをもっており、販売肉牛の枝肉格付等級「5率」が17.0%、佐賀牛の要件であるBMS7以上が35.1%、「A4以上」が62.0%と良好な肥育成績を収め、全国肉用牛枝肉共励会(東京都食肉卸売市場主催)で3年連続上位入賞(平成15~17年度)する実績をもつ。

### (2) 創意工夫による飼養管理

中村牧場では、牛舎建設の際から機械化による作業効率向上を念頭に通路、飼槽等広く設計している。このことで中古フォークリフトを利用した移動式自動給餌機(濃厚飼料用、粗飼料用)など牛飼養管理の効率化、合理化を推進しており、この結果として飼料給与時間と労力が軽減されるとともに、飼養牛の観察時間を確保でき、事故率が常時頭数対比で0.8%と事故予防にも効果をあげている。

さらに、牛舎の屋根を高く建設しているため、通気性がよく、事故予防と肥育成績の向上につながっている。

### (3) モト牛導入

導入モト牛はすべて九州産(宮崎県)である。開催市場を日常的に回りながら買い付けを実施している。なお、導入牛は市場平均よりも15~20%ほど安価な雌子牛を中心に購入している。

### (4) 経営感覚

平成13年9月にBSEが発生し、牛枝肉市況が暴落した。当時、多くの肉用牛農家は、回復しない子牛市況や枝肉市況に絶望していたが、中村牧場では、新たに牛舎を建設し、安

価になった子牛を多く導入し、枝肉市況が回復した後に販売することに成功した。ほかの肥育経営では資金繰りが極端に悪くなったが、中村牧場では規模拡大の選択が可能であり、枝肉市況が回復した後のさらなる経営躍進につながったのである。

さらに導入価格の高騰によるリスク分散の考え方から、繁殖部門にも取り組んでいる。

#### (5) 繁殖部門の導入

肉用牛肥育経営は、牛枝肉市況と導入価格に影響されるが、高騰する導入価格を低減するため、長女を中心に繁殖部門（自家産肥育牛の生産）に取り組んだ。

繁殖部門の導入については、経産牛導入により肉用牛繁殖経営のノウハウの構築と先進事例の調査を行い、平成 17 年からフリーバーン牛舎による省力管理と哺乳ロボットを利用した超早期離乳技術に取り組んだ。繁殖成績はたいへん良好で、分娩間隔が 12 ヶ月を下回る繁殖雌牛も多い。

#### (6) 肉牛新生産システムへの取り組み

平成 11 年度には、佐賀県経済農業協同組合連合会から強制換気方式と暑熱対策を組み合わせたモデル牛舎をリースし、事故率軽減と飼育環境改善による肉質向上のモデル実践を行った。以後、当経営ではモデル牛舎を参考に建設を行っている。

#### (7) 収益性の高い肥育経営

以上のように、「佐賀牛」ブランドの有利販売と優れた生産技術、低コスト生産により収益性の高い肉用牛肥育経営を確立している（販売肉牛 1 頭当たり当期純所得 19 万円）。

#### (8) 後継者の育成

現在、2 男 1 女が後継者として就農し、ゆとりある家族中心の牛飼養管理を目指し、後継者の意識および飼養管理技術の向上を図ってきた。円滑な後継者の育成、このことが結果として近年の規模拡大と販売成績向上を実現できたのである。

なお、家族経営協定（平成 18 年 1 月締結）や法人化（平成 18 年 3 月）に積極的に取り組み、家族経営を中心とした経営体でありながら、職場環境の向上に努めている。

## 5 地域農業や地域社会との協調・融和のために取り組んでいる活動内容

### (1) 耕種農家との連携による資源循環型畜産経営

唐津地域では、水稻、みかん等の果樹、ネギ等の蔬菜園芸の高品質な農産物が生産されている。とくに耕種農家がたい肥の利用について熱心であり、中村牧場は良質たい肥の供給元として重要な位置付けにある。

たい肥は、当経営が JA に原料を販売し（JA 堆肥センターに搬入）JA にてたい肥化された後、耕種農家に安価で販売されている。当経営が大規模な肥育経営の飼養管理に集中できるような環境の整備を JA 等関係機関のサポートにより実現されたことが、当経営の発展に重要な役割を果たしてきたといえる。

### (2) 牛観ヶ丘公園の建設

中村牧場では、現在、牛舎に隣接する地に「牛観ヶ丘公園」を建設している。同公園を整備し、四季を通じて彩りゆたかに花を植栽することで、地域のふれあいの場および従業

員の憩いの場として活用する予定である。

### (3) 地産地消への取り組み

JAの協力を得て、販売した肉牛（牛肉）のうち1頭を、毎月「感謝祭」として地元Aコープにて安価で販売し、「佐賀牛」の啓発普及と消費拡大を図っている。また、学校給食でも毎月100kgほど利用されている。

### (4) 雇用の創出

中村牧場では、主要な飼養管理は家族で行うことを基本としているが、飼養規模の拡大とともに、牛舎内の環境美化（飼槽および牛舎内外）のためのパートやシルバー人材を地元から雇い入れており、雇用の場を提供している。

### (5) 畜産後継者の育成

中村牧場は、研修生や農大生などの研修を年間6～7人程度受け入れており、畜産後継者を育成することに尽力している。

### (6) 地域社会への貢献

唐津地域は本県で最大の畜産地帯であり、本人がJA肥育部会の副会長および佐賀県肥育牛部会の役員、長女が繁殖部会の副会長などを務め、地域のリーダー的存在となっている。今後、地域において当経営の果たす役割が大きくなるとともに、畜産が地域社会の大きな役割を担うことが期待できる。

## 6 今後の目指す方向性と課題

「佐賀牛」生産および低コスト化により高い収益性を確保する。今後とも経営者の理念である「利は元にある」を実行していく。

後継者を育成するとともに、飼養管理の効率化を目指し、ゆとりある肥育経営を目指す。

経営規模を拡大し、生産基盤を確立する。また、繁殖部門の拡大による自家産肥育モト牛を確保することで、モト牛の導入経費を低減し、収益性の向上を図る（肥育部門2,000頭、繁殖部門500頭）。

自己資本比率を向上させ、経営基盤を確立する。

JA合併による地産地消や良質たい肥の生産・供給を地域に推進する。

認定法人として地域畜産の振興に努める。

【写真】



牧場遠景



牛観ヶ丘公園



機械体系を考慮し、広さに余裕がある通路



フォークリフトを利用した粗飼料用給餌器



自動給餌器での粗飼料給与



フォークリフトを利用した濃厚飼料用給餌器



衛生対策:石灰散布後に空舎期間を1カ月と  
る



JAのたい肥センターを利用

